

# 古墳のあるキャンパス

—— 関西学院構内古墳と私 ——

関西学院大学名誉教授

武 藤 誠

## は し が き

昭和55年の8月、小原関西学院同窓会専務理事から、9月刊行の「母校通信」64号の表紙を、学院構内古墳のカラー写真でつくり度いので協力してほしい、との申し出をうけた。週刊誌型のこの冊子は、年二回発行の同窓会の機関誌で、表紙は四季おりおりの美しい校庭の景観写真を用いるのを例としている。校庭にほぼ完形の6世紀の横穴古墳があるという、稀れな景観をとりあげることは、面白い企画だと思い、協力を約した。同時に専門知識のない同志の方々のために、古墳の解説の執筆もお引きうけをした。そして与えられた字数に、なんとか納まるようにと苦勞して認めたのが本稿である。

この古墳を調査し、研究し、それを発表し、また保存策を講じた過去半世紀の思い出をたどれば、小さいながら日本の考古学と文化行政の歴史を反映しているので、語りたいこと、記したいことは尽きない。特にこのような仕事が常に歴代の考古学研究会の熱心な会員諸君の努力に支えられて進められていることは、特筆せねばならないが、それも一言触れるにとどめねばならなかった。

本稿は老研究者の思い出の記にすぎないが、このような文を綴ったことをせめて考古学研究会の諸君に報告し、感謝したいと思い、貴重な紙面を提供してもらった次第である。

なお、「母校通信」より転載するに当たり、若干の補筆や、省略をおこなった。また同窓会事務局の了解も得たことを付記する。

## 1

六甲山東麓の景勝の地、「上ヶ原」台地の名は、関西学院のキャンパスとなって以来、ひろくその名を知られるようになった。校歌「空の翼」でくり返しとなえる「上ヶ原ふるえ」の歌詞によって天下に周知されている。

ところがこの地名は、実は学院移転（昭和4年）以前から、古代史研究者の間には、古墳の分布いちじるしい地としてよく知られていたのである。このことは、古墳をはじめ考古学上の遺跡や遺物の発見が、新聞紙上に大きい活字になり、考古学に関する世人の関心と知識がいちじるしく高くなった今日でも、意外の感をもつ人が多いだろう。上ヶ原で何カ年か学んだひとたちでも、恐らく知っている人はすくないと思う。昭和のはじめごろから住宅地開発がはじまり、多数遺存していた古墳がすでに姿を消して仕舞っているのだからそれも止むを得ないだろう。しかし、ただ一基、それも八分通り、形態・構造をよくのこしている古墳が、学院内に破壊されないで遺されているのだが、その貴重な、今日いう文化財の存在さえ知らない人が多い。キャンパスに、古

代史研究に重要な古墳をもっている大学は、まずあるまい。昭和7年以来、学院の各学部で日本史学を講じ、しかも古代史とくに考古学を研究分野とした私は、来任以来この古墳にいろいろのかかわりをもった。その経緯のあれこれを記し、学院関係の人たちに、この古墳を知っていたきたく、本稿を執筆した。

## 2

上ヶ原の古墳に関する最も古い記録は、享保20年（1735）に並河誠所が編述刊行した『五畿内志』のうちの「摂津志」で、「車塚は上ヶ原新田」（武庫郡「陵墓」の項）と記し、荒墳の一として記している。車塚とよばれる古墳は全国に多い。それは前方後円形の墳丘をもつ古墳に一般的に名付けられているので、この呼び名からこの古墳がいわゆる前方後円墳であることがわかる。その位置は安政4年（1857）の村絵図に可成り大きくえがかれているので、ほぼ推定される。どうやら学院敷地内の南部あたりらしい。若しこの前方後円墳がこわされずにいたら、上ヶ原の景観は大きく変わったものとなり、学院キャンパスも、今日のような敷地をとることが出来なかったであろう。

上ヶ原の古墳が郷土史家の注意をひき、考古学者の専門研究がはじまり、学界に知られるようになるのは大正の中ごろから昭和のはじめである。大正7年に有名な喜田貞吉博士が『摂津郷土史論』に執筆され、のち『神戸市史』別録1（大正十三年刊）に収められた「武庫地方上代の遺物遺蹟」という論説に

甲東村上ヶ原新田の北方、仁川南岸より山手にかけて群集墳あり、今尚二十数個存す。と記され、小林行雄氏が昭和9年に発表した「技術からみた古墳の様式」（『考古学』5-6）に載った上ヶ原古墳群20基の分布図によって、群集墳の遺存例として注目されるようになった。その分布地域は現在の心理学研究室（ハミル館）やテニス・コートのあるあたりに当る。

## 3

私が上ヶ原古墳群を知ったのは、旧制高校在学中の大正14年秋、居宅が仁川に移ったので、休暇中に仁川河畔や兩岸の台地の緑辺一帯を散策するようになって以来のことである。もちろん、まだ考古学の知識もなく、歴史好きの青年の目で見るとすぎなかった。京大で日本史学を専攻するようになって、史学理論や史料原典の勉強に忙しかったので、特に関心をもつこともなく、住宅地開発のために次第に失われて行くのを見送っていたのは、今から思えば恥ずかしい次第である。

卒業後、兵庫県の嘱託をうけ史蹟調査にたずさわるようになり、昭和7年から学院の大学予科で日本史を講義することになった。当時、神話伝承にはじまる日本古代史ではなく、古代人の生活の中で生み出された道具や、住居跡や、墓など、有形文化遺産によって実証に日本史の黎明期を把えようという学風が興っていた。私はこのような学風の中で育ったので、学問を実践に移すのに、もっとも恵まれた職場を与えられたわけである。

当時学院には史学を専攻する教員がなかったので、予科だけでなく、専門学校として存続して

いた文学部や神学部でも授業をもち、縄文土器や弥生式土器、銅剣・銅鉾・銅戈や古墳の講義をした。これらの遺物・遺跡は、そのころは限られた人たちにしか知られていなかったので、学生諸君に喜ばれた。古い同窓に会うと「先生の授業で古墳の話だけはおぼえています」と云ってくれる人が多い。兵庫県の史蹟研究の任務も、引きつづきやっていたので、その立場を活用して学生有志をつれて県下の代表的な古墳を見学したこともある。姫路市にある壇場山古墳へ行ったとき、当時予科生であった小寺学長も参加し、後日その思い出を語って呉れたことがある。

キャンパスの古墳は、周辺の古墳が姿を消していくに従って稀少価値を高めた。この古墳だけは保存したく、それにはまず学院内部の人たちによく知って貰いたかったので、調査記録をつくり、写真と実測図をそえて、昭和10年11月刊行の「甲陵」（大学予科会発行）に登載した。この調査には柏倉亮吉氏（当時予科の授業担当講師、現在山形大学名誉教授）が協力して下さった。また予科の児玉国之進先生と予科生加藤・川口両君の助力を得た。こうしてはじめて「学院構内古墳」が正確に世に知られることになった。その記述概要は次記のとおりである。

学院敷地の西北隅、図書館裏の池（いま池を埋めて社会学部校舎があるところ）の西北方に位置し、古墳時代後期（6世紀～7世紀前半）の、横穴式石室をもつ円墳である。封土は径12m・高さ3m、石室は入口を南に開いた狭長な平面をもち、玄室の奥行4.74m、幅1.5m、高さ2.40m。側壁は上方へ、もち送って積み、幅をせばめてあり、天井部では70cmとなっている。天井石は四個の巨石を用い、巨大な奥壁の石とともに、この形式の古墳構築の特徴を示している。羨道は破壊部分が多く、全形不明だが、東壁は玄室東壁の延長線につくり、西壁をもち出して幅を1.20mにせばめている。長さは残存部で5mを測る。高さは明確に測り難いが、玄室部との境で1.60mである。（石室の計測値は後述の再調査のデータによる）

#### 4

戦時中、キャンパスの大部分が徴用されたが、古墳の所在地は幸いに供出をまぬがれたので旧状のまま新しい時代を迎えた。日本史とくに古代史の見方が大きく変わり、考古学の研究成果にもとづく古代史の見直しが歴史教育の主流となって、古墳をはじめ古代の文化遺産が歴史資料として重んじられるようになった。学院大学にも文学部に史学科が開設され（昭和26年）、日本史学専攻コースが置かれ、日本考古学を研究テーマにする学生ができた。考古学研究会も生まれ、多数の学生が集るようになったので、学院古墳の再調査を行なった。たまたま西宮市史編集事業がはじまり、私はその専門委員になっていたので、市史の資料調査作業の一つとして昭和34年の春休みを利用して史学科学生とOBによってこの調査を実施した。玄室内に流入していた土砂を搬出し、床面を検出して墳の構造を明らかにすると共に、埋葬遺骸の一部や副葬品を見出し、多くの収穫を得た。副葬品は金環（銅芯金張りの耳環） 5、滑石製勾玉 1、こはく製なつめ玉 2、碧玉製くだ玉 7、水晶製切子玉 6、硝石製小玉 35をはじめ、鉄鏃 4、馬具（革帯留金具片） 1、須恵器（埴、坏各1）と断片若干であった。遺骸は棺が全く失われ、床面で大腿骨ほか骨片若干と歯二個体以上が見出された。本来家族墓の性格をもつ横穴式古墳であるから、二次、三次埋葬がおこなわれたのであろう。



関学構内古墳（東北方から見た全形）

なお市史を執筆中に本墳の東南30mばかりのところにも古墳があり、用水池をつくったときに破壊され、その副葬品が、大正三年に池底の掘りさらえ作業中に発見されたことが、宮内省諸陵部に提出された書類によって判明した。この提出書類に、数多い古墳が周辺山林にあり、村人が「百塚」と呼んでいると記してある。このことは、学院の古墳が群集墳の一つであることを証明する。古墳の築造は前期・中期には限られた少数の権力保持者のみがなし得たが、後期の末になると、戸単位にささやかながら、今日古墳とよばれる形をそなえたものをつくるようになり、爆発的にその数を増し群を形成した。学院の古墳はその構造や副葬品から見て、この古墳群のうちで一段ぬき出たものと思われる。従って集落のうちでのもっとも有力な家の墓といえよう。

## 5

こうして次第に脚光を浴びるようになった「関西学院構内古墳」は、西宮市が文化財保護条例を制定して間もなく、「西宮市指定文化財」に指定され（昭和49年3月）、翌50年には市費をもって保存のための金網や説明板がつくられ、旧観一変した。末永く保存の保障がえられたことは喜ばしい。それに増して嬉しいことは、去る51年3月定年退職した私に、考古学研究会の学生諸君が『関西学院考古』第3号を「仁川流域の後期古墳研究号」として献呈してくれたことである。